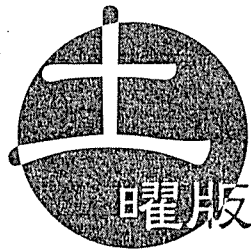
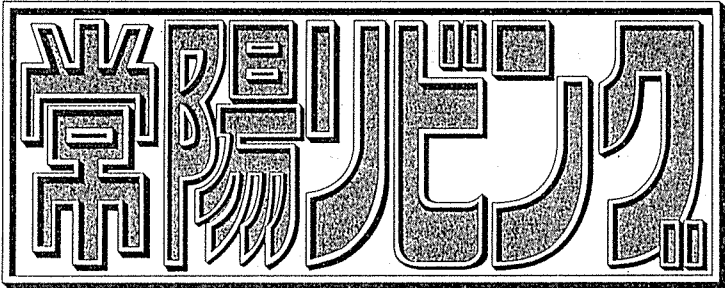


毎週土曜日発行 発行部数224,060部

6/16 2001



日本ABC協会加盟紙 (新聞雑誌部数公表機構) JAFNA 日本児童福祉協会 http://www.jafna.or.jp

発行所 常陽リビング社 〒300-0051 土浦市真鍋2-12-10 Phone0298-21-1694(代表) Fax0298-24-8443 ★★★★★くらしの情報専用 Fax0298-22-6040 インターネット接続先 http://www.joyliving.co.jp

配布エリア 土浦市・牛久市・石岡市・龍ヶ崎市・下妻市・水海道市・つくば市・阿見町・菱崎町・茨城町・鹿嶋市・千代田町・新治村・麻代町・谷和原村・守谷町 他

「一人の子供も見落とさない」

子供を取り巻く問題が表面化するたびに、家庭が悪い、学校が悪い、行政が悪いと責任転換をしている社会。元公立中学校の教師として教育現場の最前線にいた小野村哲さん(41)は、その経験を生かし「教師と子供の学校」から「地域社会の中の学校」への脱却を図ろうと教師を退いて活動を始めた。その生き方の原点とは。



学校ではなく、地域から子供を支えたい

外の、自分にとつての重要な教員の質問にしっかりと向き合ってくれない教師に対して疑問を持ち始めたのも小学生のころでした。歴史が好きで、一連の出来事の流れでとらえることは得意だが、数字に弱い年母の暗記が苦手。いわゆる「テストのため」の勉強に割り切れない思いを抱きながらも学校が大好きだった少年は、中学に入ると「生徒ときちんと向き合える先生になりたい」と教職を意欲するようになった。下妻一高では「成績もバツとせず目立たない生徒」。自信を失い欠けていた時に当時の担任の「これからの教育界はお前のような人間を必要としている」という一言が将来の道を決定付けたと振り返る。日本大学に進学し、とにかく積極的に

元公立中学校教師の小野村さん

「学校に戻すのではなく、一つの選択肢としてのフリースクールを目指している」という小野村さん。個性を重視して笑顔で対応する

と思っただけです。生徒は逃げられないんだって。どんなに授業に付いていけなくても、固いすじじじと座ってる。なんて偉いんだらうって。それからです。授業も自分なりに工夫を凝らしたものにしよう、とかくよく研究しましたね。楽しく学べる授業作りをしなれば。その積極的な姿勢が評価され、さまざまな研究発表の場に推薦されたほか、指導要綱の共同執筆を任せられるなど高い評価も受けた。学校生活は充実しており、学校特有のさまざまな問題に直面しながらも教師は天職だとさえ思っていたという。でも、その陰で見落とした生徒も確かにいたんです。ジレンマは常に感じていました。数の論理で進む教育は100分の1程度の枠からはみ出した生徒を「仕方なし」とする。そして事故が起こった。ある教員がバイク事故を起こして亡くなった。棺の中の穏やかな顔を見たときに、学校教育にある種の限界を感じてしまった。言いようのない無力感は一瞬からはみ出してしまった生徒を救うことの出来なかつた罪悪感を経て「これから自分ができること」の再考とつながった。時間はない。そして99年3月、つくば市立筑波西中学校を最後に、16年間の教員生活にピリオドを打った。「とにかく悩み抜きました。でも後戻りは出来ない」と思っただけです。僕はこれからはたまたま1人でも見落とさない。自分もはみ出してたであろう1人として、教師として生徒全員と向き合いたい。でもそれは学校という枠内では無理なんです。だから自分は学校と連携しながら、外から少しでも多くの子を救える場をつくらうと決意したんです。だがが悪いとか、どこの責任だとか、そういうことを言っているのは始まらないんです。退職後に見学に行ったフリースクール「東京シューレ」の生徒との出会いも大きな刺激になった。「あんなに理路整然と、自分の考えを話せる子供に学力ではない『生きる力』を見ました。ショックでした。今まで自分は何をやってきたんだらうって」。

昨年、不登校児童・生徒のための教室「ライス学園」をつくば市に開設。今年4月にNPO法人の認証を受け、あくまでも「学校と連携しながら」不登校の子供たちのためのスペースを運営している。さらに親や教師のための相談窓口なども併設した「学校サポートセンター」の構築を目指している。

※シンポジウム「不登校に学ぶ―東京シューレの子供たちを招いて」が24日(日)午後1時～4時50分、東京家政学院筑波女子大学で開催される。参加費500円。問い合わせは ☎0298-8143 / ライス二の宮事務所 <http://www.isej.jp/> まで。